

スポーツクラブ人国記

(8)

ヨット部

創部

(名前のあとの数字は卒業年次で昭和昭和、平は平成、ゴシック体は理・工学部)

大阪市大ヨット部は昭和十五年に始まる。翌年に日本は太平洋戦争に突入する。拡大する戦費、時局の緊迫化に伴い、学校当局から体力増強を目的として全員いづれかの運動部に所属せよという強い方針が打ち出された。

いづれの部にも属していなかった小笠原彰佑と井関一徳(ともに昭一六)の二人が、関西では阪大、関学、同志社にしかなかったヨット部をみて、「よしこれをやろう」と同好の士を集めることになった。しかし、「ヨット」という敵性語の使用では創部を認めてもらうことはかなわず、「海洋訓練部」という名称でスタートしたのが大阪市大ヨット部の始まりである。

戦局は拡大し、卒業すると召集されて戦地に送られる。それもやがて、卒業を待たずに学徒動員として学生的身分ながら軍隊に入隊しなければならぬことになる。

大阪市大ヨット部五十周年記念誌で

福岡晃三(昭二二)はその時分の様相を次のように書いている。

「ヨット部の同期全員、福岡晃三、三木基、福田進、森本茂、樽井作雄、前田美喜雄(いづれも昭二二)が申し合わせた様に海軍入りを志望し、勇躍、海兵団に入団。あの懐かしいジョンベラ(水兵服)を着た身分から、わずか二年後の昭和二十年、我々は敗軍の兵として帰阪する事となった。早速復学して西宮へ行ってみると、浜に引き上げられて伏せられたまま、二年の歳月、風雨に晒されて来た我が愛艇「そよかぜ」、「あさかぜ」、「しおかぜ」の十二フィートデインギー三隻は、艇体のペンは剥がれ放題、舷板は隙間だらけで、ヤッコラヤッコラ担ぎ下ろして水に浮かべた途端、一瞬にして水船の状態、早速、砂浜に引き上げ、板の隙間に棕櫚を詰め、破れた舷板を木片で貼り、二週間余りでペンキ塗装も終わった。その日から、元帝国海軍のスマートであった青年士官たちが、ルンペンよりひどいぼろ着に身を固め、「スターボード!」などと大声をあげながら、ヨット練習に明け暮れる事にな

ったのである」

ヨット部の旗



艇庫・合宿所の変遷

ヨット練習といっても当時はヨットの修理半分、練習半分で艇庫はなく、大阪大学の艇庫の壁にもたれかかるように庇を設けて備置き場とし、合宿は近所の民家の二階を借りていた。当初の所有ヨットはA級デインギー(約三・六メートル)三隻であったが、昭和二八年にはA級デインギー六隻、スナイプ(約四・七メートル)四隻を保有していた。その資金源は、戦後に大學生の間で社交ダンスが大流行し、ヨット部では舞踏会館、大阪みなみの美人座や富士といった大型のキャバレー

でダンスパーティを毎年開催して得た収益金であった。昭和三十一年には念願の艇庫兼合宿所(百平方メートル)が西宮浜に建築できたのもダンスパーティの収益金によってであった。

西宮浜での充実したヨット部活動を持てたのは数年で、昭和三六年には第二室戸台風で浜は大きな被害を受け、さらに、昭和三九年には台風二十号で西宮浜全域にわたって壊滅的な打撃を受けた。市大合宿所は見るも無残に打ち壊されて残骸こそ残ったが、阪大や関学の艇庫は跡形もなかった。砂浜に伏せておいてあった艇はすべて対岸の川崎重工工業岸壁に打ち上げられていた。

これを機に、西宮浜の台風被害からの回復の先が見えていないこともあり、ちょうどこの年に貝塚市二色の浜に大阪府立ヨットハーバーの建設が進んでいて、従来の西宮へ通うよりは近いということもあって二色の浜に移ることになった。

西宮から移ったのは市大、府大、大阪外大の三校で、新たな雰囲気ですヨット部活動が再開したのは昭和四二年二月であった。

それから二十年、当初は市大ヨット部専用の感があった二色の浜の状況も大きく変わり、他大学ヨット部が次々

に生まれハーバーの施設が狭くなってきたこと、海面の埋め立てが進みハーバーからセーリングゾーンまでの距離が遠くなったこと、プレハブの合宿所の老朽化等などたくさん問題に直面していた。

昭和六一年、大阪市港湾局が大坂此花区に十年かけて建設してきたヨットハーバーが完成しつづであった。大阪市の職員であった平田讓（昭三九）がそのとき偶然、港湾局職員としてそのヨットハーバーの管理、運営計画策定に携わることになった。

平田は、健全な青少年の育成や広く一般市民にマリンスポーツを普及させるなどを目的とした大阪市側の立場と利用者側としての立場の両方に立って見事な綱裁きをみせた。昭和六二年に西日本では初めてと云うていい立派な大阪北港ヨットハーバーが完成し、大阪市大ヨット部は二色の浜から合宿所を当地に移した。

時は移り平成二四年、財政状況の悪化と橋下市長の厳しい支出削減の流れの中で大阪市はヨットハーバーの売却を検討し始める。平田の功績と云うていいハーバーの学生による宿直バイト代収入は各大学ヨット部の重要な資金源だったが、この年に廃止されてしまった。

平成二七年三月に大阪北港ヨットハーバーは関東の民間会社に譲渡されて名称が今の「大阪北港マリーナ」に変わった。幸いにして新しい所有者は大学ヨット部の活動に理解を持っておられるようで、何とかヨット部の活動は従前どおり続けられている。廃止されていた宿直バイト代は単価切り下げて平成二七年に復活した。

大阪市大ヨット部の練習場所はそのマリーナの北水域、すなわち、阪神高速五号湾岸線の大橋の下西側の淀川河口一帯である。

ヨット競技

ヨット競技は、海上にあらかじめ浮かべた三、四個のブイを回航してゴールする早さを競う競技で、コース（ブイを回る順番）はそのときの風向きによって発表され、スタートの号砲に合わせてスタートラインを越えてレースが始まる。そのときの風向き、波の状態に合わせて艇の傾きや帆の張り方、乗組員の体重の移動などを考えて艇がいちばんスピードの出る操船でゴールを狙う。巧みな操船に加えて勝つための大事なことは、そのときの風向きと潮の流れを考えて次のマークまでの最善と思う航路の選択である。下手な操船でも航路の違いによって勝つことも

ある、そういった技術だけの勝負のスポーツでないところにヨット競技の面白さがある。関西水域で強いのは関学、関大、近大、甲南で我が市大ヨット部は大した戦績を残していない。

平成二八年七月二、三日に開催された二〇一六年関西学生ヨット個人選手権の市大艇（艇長 前、小溝真慧、後、高田裕司）

和歌山セーリングセンター沖



昭和三八年には関貴美子、萩原美彌子、佐藤彌生（いずれも昭四十）の当時は珍しい三名の女子部員がいて、関西女子選手権、大阪府立女子選手権を獲得し、その年の国体では三位といった輝かしい記録を残している。平成

四年から女子部員が急に増え始め、平成十二年まで連続して全日本学生女子ヨット選手権大会に出場を果たしている。

男子の方はといえば、唯一、昭和四五年、主将橋本剛（昭四六）のときに関西インターカレッジで優勝し、全日本では五位という記録がある。平成三年に十八年ぶりに四七〇クラスで全日本に出場している程度で、どちらかというと競技で「勝つ」ことよりも「ヨットに乗る楽しみ」で満足するという傾向が伝統的であったように思う。

ヨット人生を楽しむ

卒業してから五メートルのシーホース級艇を購入し、大阪湾一周、琵琶湖一周、播磨灘を何日もかけてクルージングを楽しむグループが誕生した。中村節哉、瀬川正裕、大木治雄、尾辻伍朗、松本郷介（いずれも昭三二）のグループと、西野恕、池上四郎、米沢隆稔、塩田勉、鈴木時三、山本嘉敏、松野文平（いずれも昭三四）のグループで、現役の学生たちもそれに乗せてもらうのが余禄であった。木村安夫（昭三二）は昭和三四年、勤務先にヨット部を作りシーホース級艇で関東葉山近海を、次いで仲間を募り七メートルのクルーザー、そして、平成九年には九

メートルのクルーザーを自前で買って油壺を基地として、東京在住のOBらと東京近海を最近まで乗り回していた。

昭和四七年には昭和三四年卒から四五年卒までのうちの十七名が金を出し合せて十メートルのクルーザー・ファーンズ一世を購入した。その処女航海で西野、森貞浩一(昭三七)、柳内義博(昭四十)、梅木幹雄(昭四四)の四名が小笠原諸島・父島に往復十四日を含めて二十五日間の初めての外洋帆走を楽しんだ。四名は勤めを休んでのことであつた。堀江謙一が単独無寄港世界一周をしたのが昭和四九年で、この時分から「ヨット」は若者の憧れのスポーツとなり、次々と外洋帆走を楽しむグループが生まれる。

笹岡耕平(昭三九)は、昭和五十年の太平洋横断レースに出場したのを皮切りに数々の外洋ヨットレースに出場したほか、西回り世界一周など彼の今までの航行距離は十五万マイルにおよび地球七周分に相当するという。そのなかでも平成十二年にヨットでヨーロッパの内陸水路横断を成し遂げたのは日本人で初めてのことで、そのときの航程を「ヨット『招福』のヨーロッパ紀行」という本で詳細に書いている。笹岡はほかに航海やヨットに関する

本をたくさん著していて、わが国におけるヨットマンの第一人者と言っている。

昭和六十年に柳内、恒岡伸治(昭四十)、川本雅秀(昭四二)、伊吹聖治(昭四六)、山田啓之(昭五五)等は二回目の小笠原諸島に、昭和六二年には竹内清治(昭三三)が主宰するグループが購入した十四メートルのクルーザーで山田、柳内、安居亨(昭五五)、江木渉(昭五八)等が東京・グアム島間のレースに参加している。竹内はそのほかにも自分の経営する会社でヤマハの十一メートルモーターボートを購入し、大阪湾を走り回っていた。

柳内は、竹内のクルーザーで平成三年に、五年かけて世界一周を果たしている。また、帰国後も暇があれば大阪湾回遊を楽しむ一方、大阪梅田でヨット仲間相手の酒場「コクピット」を開いている。若林成一(昭四四)は大阪堺で「大浜ドッグ」を開業して、ヨットの整備や販売を生業としている。若林はヨーロッパでヨットを買い、自らの帆走で日本に運ぶことを得意としている。佐野順一(昭四六)はトヨタ自動車(株)マリン事業部に就職し、その後ジェイマリン(株)でやはりヨットの売買、整備を業としている。

片山龍(昭四五)は、平成十七年に

早期定年制を利用して八メートルのクルーザーを購入し、GPSやオートパイロットを独学で習得し、家族とヨットライフを楽しんでいる。片山は笹岡の長崎から硫黄島、沖繩諸島を経て高知、大阪の四十五日間の航海に便乗させてもらっている。上田二郎(昭三三)は、平成八年に十一メートルのクルーザーを、そのほか藤井正之助(昭三七)、山田修三(昭四〇)ら市大ヨット部OBで卒業後ヨットライフを楽しむ者は多い。

平尾幸一(昭四四)は十メートルのクルーザーを単独で買って、一昨年に四、五年かけての日本一周航海に出ている。平成二六年は九州を一周、平成二七年は沖繩・石垣の諸島を一回りして九州から福井へ、そして今年、函館から北海道一周をして年末には蒲郡に戻ると言っている。この日本一周には加藤勝嘉(昭四二)、西山均(昭四七)、上家英雄(昭四七)、山岡祥記(昭四五)、安居が時折、区間便乗している。

現在、十二メートルのクルーザー・ファーンズ四世グループは、加藤、安居、山田、山岡を主たる世話人として、他に西野、山本、伊吹、松下満男(昭五六)等の常連メンバーが大坂湾、淡路島周辺、新和歌浦あたりを遊覧航行し山岡と加藤の手料理で、船上では酒

談義で言いたい放題の時間を楽しんでいる。

藤本一智(平七)は、世界の名門ヨットクラブだけが参加できるハイレベルのレースに日本セーリング連盟チームの乗組員の一人として参加している。よほど高度な技術がなければ乗組員など選ばれることはない。稀有な存在である。

そよかせ会(OBの会)

揮毫は矢澤敏雄(昭和二年卒) 号・勝石



大阪市大ヨット部のOB会の名称は「そよかせ会」という。昭和十六年、学校に頼み込んでインギー一隻を建造してもらった時に、当時の大阪商科

大学の河田嗣郎初代学長がその進水式に来て、そのヨットに風偏に「卯の花開くうつせみに」の「卯」と書き「そよかぜ」と命名されたのが「そよかぜ会」の名の由来である。

漢字辞典にはない造字であるが、まさに「そよかぜ」を表している。

平成二年には創部五十周年を記念し、「そよかぜ 五十年の航跡」(発行 恒岡、編集責任者 加藤)と題した四百五十ページの記念誌を発行するとともに、大阪北港ヨットハーバー公園にその後の毎年ヨット部卒業者の人数分の桜の木を大阪市に寄贈、植樹を開始した。いまでは大阪市の桜の名所の一つになっている。桜花爛漫の毎年四月にその桜の木の下でそよかぜ会主催の花見会が開催されている。東京支部では関東在住のOBたちが毎年、江の島ヨットハーバーで乗艇会を開催し家族連れでヨットライフを楽しんでいる。

平成十二年の六十周年には「そよかぜ二〇〇一年新世紀へ向けて」(発行 西野、編集責任者 広島伸一(昭和六二))と題する記念誌を発行するとともに、大阪市立大学ヨット部ホームページを鍋島美奈子(平六 准教授)の協力のもとに開始した。(http://ocu-y.com)

現在のそよかぜ会会長は山岡詳記(昭五五)、東京支部長は藤野勲(昭六二)、OBの数は三百六十三名、うち女子は三十九名である。

北村晋(平五)は関西学生ヨット連盟理事で、広島伸一(昭六二)が事務局長、太田昌久(平七)がレース委員、山岡が彼らを支えて学連との緊密な関係を保持している。

学生ヨット部部長は鍋島、部員数は三回生二名、二回生二名、一回生九名

の計十三名である。

市大ヨット部の会計支出は年百五十万円程度で推移していて、そよかぜ会からはこの四、五年毎年一百万円前後の支援金を贈っている。山岡はヨット部の部員数の確保と支援のための会費集め、そして、棚上げ状態とはいえず大との併合問題など今までにない会長としての苦勞を背負っている。

(昭和三四年商学部卒 西野 恕)

『ゼンマイジカケ』 ふたば祭 催行

平成28年4月21日(木)から23日(土)の3日間にわたって、ふたば祭が開催された。ふたば祭とは、毎年4月に行われている新入生を歓迎するためのお祭りのことである。第11回目となる今年には、『ゼンマイジカケ』というテーマが掲げられた。「クラブ・サークルや新入生が地域の方々の協力を得て、ふたば祭という大きな歯車を動かして一緒に盛り上げよう」という意味が込められている。

ステージや教室に設けられた観客席では、先輩の勇姿を見つめる新入生の姿が多く見られた。その瞳には「クラブやサークルの一員として、これから



舞台上で最高の演技をする先輩学生たち

歯車を動かすんだ」と言わんばかりの気概が溢れていた。次は11月の銀杏祭が控えている。ふたば祭で観客席にいた新入生も、今度は舞台に立つ番である。ぜひとも舞台で会心の演技を見せてほしい。

丹下舜平(法学部・2年)

西野ゆるすの ホームページはおもしろい

ホームページに「脱税記事」1220件を掲載
検索キーワード【脱税と節税、土佐日記】

税理士法人西野会計事務所
代表社員・税理士 西野 恕(ゆるす)
大阪府中央区谷町5丁目6-9-504
Tel 06-6768-2791 Fax 06-6768-7384